

8. 事例7:成人してからの心の病気と闘って

～病院を出たり入ったりで10年が経って～

特定非営利活動法人 N & N Corporation 高橋紀子



<概要>

Aさん(当時32歳)は高校卒業後、親戚のリサイクル店の見習いを始めました。5年後、病気が発症して帰郷してからは定職に就けず、10年が経過しました。元の職場の上司は人間関係が上手ではなく、一人でパチンコなどをすることが多かったと話していました。

社会復帰を願って相談に来られましたが、しばらく相談室のスタッフとの人間関係の構築をすることになり、ボランティア活動や社会見学のようなことを続けて半年後に、フリースペースで学習や体験学習をすることを提案して春のスタートに向けて準備をしいよいよ、通所形式の支援をスタートしようという矢先に、支援を拒否してしまいました。

<この対応はダメだった>

★最初の訪問サポートで、本人には突然の面談となり当惑させた。

→母親との面談では、突然の訪問でもOKという依頼だった。

★2人で訪問したが、事前の打ち合わせが十分でなかった。

→1人は訪問サポートの研修修了者で、もう1人は未経験者だった。(個人レベルでは相談の経験あり。)

★家族との面談を十分にしなかった。

→母親との面談では、親子関係、夫婦関係が十分に見えなかった。(特に父親との面談も大切)

★家族会や精神福祉関係の講演に参加することを、家族に対し早期に勧めな

かった。→家族(両親)の役割や第三者の役割について、十分理解してもらえなかった。

★医療機関や専門機関などとの連携が不足していた。

→病気に対する当事者や家族の認識、特に支援者の認識が不足していた。

<こんな対応が良かった>

☆相談員スタッフ全員との交流の機会を持つことができた。

→Aさんの好きなカラオケやドライブなどのアウトドアの活動の時間を共有できた。

☆相談員との信頼関係を築くことができて、意志の疎通を図ることができた。

→自ら話をするという積極性はなかったが、ボールを投げると受け取ることができた。

☆カウンセリングにも1回だけ応じてくれた。

→幼児期の体験を聞くことができて、親子関係にも一つの要素があることが分かった。

☆反省点があることに気づくことができた。

→同じような支援団体や専門機関との連携が重要であることが理解できた。